

一茶俳句集

荻原井泉水編

一茶は庶民的な俳人として古くから親しまれ、その句は今日でも多くの人々に愛誦されている。ここには、「われと来てあそべや親のない雀」「やせがへるまけるな一茶これにあり」などの代表句をはじめ、一句一境、

一作一味、真に一茶の面目を示す一千二百余句を収める。すべ

て自筆の句帖から選抄してある。



黄 223-1
岩波文庫

一茶俳句集

1935年2月15日 第1刷発行
1958年11月5日 第21刷改版発行 ©
1983年5月25日 第45刷発行

定価 300 円

編 者 おき 萩 わら 原 せい 井 せん 泉 すい 水

発 行 者 緑 川 亨

〒101 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5

発 行 所 株式 岩 波 書 店 会社

電話 03-265-4111

振替 東京 6-26240

印刷・法令印刷 製本・桂川製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

Printed in Japan

岩波文庫

30-223-1

一茶俳句集

萩原井泉水編



岩波書店

凡 例

一、岩波文庫として、さきに『新編一茶俳句集』が出ている。一茶の全作、約一万八千句の中より約一千句を選抄したもの。いまそれに約二百句を増補したものが、この『一茶俳句集』である。

二、俳句は檢索に便するために、季題分けとし、同じ題の中においては作年代の順に序列した。作年代は句の下の括弧の中にある。作年代の明らかでないものは、信拠の証として、その出ている「書名」を出してある。昔の年号は当今の読者には分りにくいかと思われる。西暦の年次と一茶の年齢とを次に掲げる――

宝曆十三年(西曆一七六三年)……一茶一歳(生)	
明和元年(“ 一七六四年)……“ 二歳	
安永元年(“ 一七七二年)……“ 十歳	
天明元年(“ 一七八一年)……“ 十九歳	
寛政元年(“ 一七八九年)……“ 二十七歳	
享和元年(“ 一八〇一年)……“ 三十九歳	
文化元年(“ 一八〇四年)……“ 四十二歳	

文政元年(〃) 一八一八年…… 五十六歳

文政十年(〃) 一八二七年…… 六十五歳(没)

——以上は数え年に依る——

三、一茶の作には相似の取材のことが多い。それはその数句中の一句をのみ取りあげた。例えば

小言いふ相手のほしや秋の暮

(文政六年)

小言いふ相手は壁ぞ秋の暮

(文政六年)

○小言いふ相手もあらばけふの月

(文政六年)

同様の取材にて、その間に数年をへだてるものもある。

○一人と帳面につく寒さかな

(文化七年)

一人と書留めらるる夜寒かな

(文政元年)

これらは○印のもののみを選出した。名高い句としても

むまさうな雪がふうはりふりかな

(七番日記)

○むまさうな雪がふうはりくくと

(文政版
一茶發句集)

うまさうな雪やふうはりくくと

(隨齋筆記)

かように表現の上の小異あるものは、推敲工夫したものとも考えられるし、一度書いたものを忘れていて、更に同案のものを書く時、しぜんと書きかえられた場合もあるうと思われる。

我星はどこに旅寝や天の川

(享和三年)

我星はどこにどうして天の川

(文化九年)

我星は今は旅寐や天の川

(文政四年)

一、二字の差のものはきわめて多い。

○蟻の道雲の峰よりつつぎけり

(文政二年)

蟻の道雲の峰よりつつぎけん

(文政二年)

蟻の道雲の峯よりつつぐかな

(文政九年)

こういう句は他書の句と較べて、誤植であるかのごとく思われようが、私としての判断で選定したのである。

四、前書(まえがき)は必要とおもうものは残しておくが、さもないものは省いた。また文章のあとに句を書き添えたという風のもので、その文章のあまりに長いものは省略した。

五、かなづかいはいは凡て原本の通りにしておく。用字は一茶が特殊の使い方をしたもの、例えば「加えて」は「啣えて」の意味、「淡」は「沫」の意味。これらは仮字に改めておく。読みにくいものは振りがなをつけた。

六、全体の検索に便するために、巻末に四季の季題別の索引をつけておく。

七、巻末の「あとがき」(解題)を一読してもらいたい。

昭和三十二年二月

目 次

新 年		二
春		三
夏		六
秋		一〇
冬		三七
一茶の俳句とその一生（萩原井泉水）		一六
あとがき		一八
一茶俳句集季題索引		一五

一
茶
俳
句
集

新 年

於專念精舍

元 日

元日やさらに旅宿とおもほへず

(寛政七年)

元日にかわいや遍路門に立ち

(寛政一年)

元日も爰らは江戸の田舎かな

(文化四年)

古郷や馬も元日いたす顔

(文化七年)

家なしも江戸の元日したりけり

(文化七年)

元日をするや揃ふて小田の鴈

(文化十四年)

元日も立のままなる屑屋哉

(文政四年)

元日や上々吉の浅黄空

(文政八年貞隆)

年 立

年立や日の出を前の舟の松

(文化二年)

心可と佃島住吉の旭おがみに行く

正月

あら玉のとし立かへる虱哉
 年立や雨おちの石凹む迄

(文化五年)
 (文政五年)

正月のけしきになるや泥に雪

(文化二年)

正月や外はか程の御月夜

(文化八年)

正月も廿日過けりはをり客

(文化九年)

餘所並の正月もせぬしだら哉

(文化十年)

正月や辻の佛も赤頭巾

(文化十一年)

正月や夜は夜とて梅の月

(文政元年)

元旦、肥後八代正教寺にありて

今朝の春

花ぢやぞよ我もけさから卅九

(寛政五年)

二つ子にいふ

這へ笑へ二つになるぞけさからは

(文政元年)

五十年ぶりで古郷に入

初

春

初欠^{かけ}鍋^{なべ}も旭^{あさひ}さすなり是^{これ}も春
 初^{はつ}春^{はる}のけ形^{なり}は我^{われ}と雀^{すずめ}かな

(文化二年)
 (文政四年)

ふしぎ也^{なり}生れた家でけふの春
 あばら家^やや其身^み其まま明^{あけ}の春
 今年^{ことし}からまる儲^{まうけ}ぞよけさの春

(眞蹟)
 (文政二年)
 (文政五年)

春

立

春^{はる}立^{たち}といふばかりでも艸木^{しよく}かな
 春^{はる}立^{たち}や四^よ十^{じゅう}三^{さん}年^{ねん}人^{ひと}の飯^{めし}
 春^{はる}立^{たち}や見^み古^{ふる}したれど筑^{つく}波^は山^{やま}
 春^{はる}立^{たち}と申^{まを}すもいかが上^{かみ}野^の山^{やま}
 春^{はる}立^{たち}や菰^{こも}もかぶらず五^ご十^{じゅう}年^{ねん}
 春^{はる}立^{たち}や彌^や太^た郎^{らう}改^{あらた}め一^{いち}茶^{ちや}坊^{ぼう}
 春^{はる}立^{たち}や二^に軒^{けん}つなぎの片^{かた}住^す居^ゐ
 春^{はる}立^{たち}や庵^{いは}の鬼^き門^{もん}の一^{いち}里^り塚^{づか}

(享和三年)
 (文化元年)
 (文化七年)
 (文化九年)
 (文政元年)
 (文政三年)
 (文政四年)

今迄にともかくも成るべき身を不思議にことし六十一の
春を迎へるとは、げに／＼盲龜の浮木に逢へるよろこび
にまさりなん、されば無能無才もなか／＼齡を延る藥に
なんありける

春立や愚の上に又愚にかへる

(文政六年)

明の春 武士町やしんかんとして明の春

(文政六年)

花の春

大江戸や藝なし猿も花の春
我庵や菜の二葉より花の春

(文化五年)

いぬころが鼠とるなり花の春
おのれやれ今や五十の花の春

(文政四年)

我の春

わが春やたどん一つに小菜三把
目出度さもちう位也おらが春

(文化二年)

(文政二年)

春來る

御傘^{おかさ}めす月から春は來りけり
湯けぶりも月夜の春となりけり

(文化十一年)
(文化十一年)

初日

上段の代の初日^{はつひ}かな旅の家
隱家^{かくれが}は晝時^{ひるじ}分^{ぶん}さす初日^{はつひ}かな
はつ旭^{あきひ}鍛^{くは}も拜^ひまれ給^{たま}ひけり
土藏^{どざう}からすちかひにさはつ日^ひ哉

(文化元年)
(文政元年)
(文政元年)
(文政元年)

初空

初空にならんとすらん茶のけぶり
初空へさし出す獅子^{しし}のあたま哉
初空の行^{ゆき}留^{どま}りなり上^かっ總^さ山^{やま}
初空をはやしこそすれ雀^{すずめ}まで
初空の祝^{しゆぎ}義^ぎや雪のちらく^くと

(文化八年)
(文化八年)
(文化十四年)
(文化十四年)
(文化十四年)